



日本福祉大学

国際福祉開発学部だより

News Letter Faculty of International Welfare Development

October. 2013 vol.

02

〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田 日本福祉大学 国際福祉開発学部 <http://facebook.com/nfuiwd/>

日本福祉大学 国際福祉開発学部ニュースレター第2号発行の運びとなりました。2013年度前期の学部行事から、夏休み中の学生各自の取り組みまで、お伝えしたいこと満載です。

今号の冒頭記事は、国際協働プロジェクト、ワールド・ユース・ミーティング（World Youth Meeting : WYM）報告です。本行事では、国内外から大学や高校が集まり、チームを組んで英語プレゼンテーションを行いました。このイベントに係る参加校との意見調整、大会前後の交流も含めた全体の企画と実施、海外ゲストの招聘手続きからホームステイ、送り出しまでの対応などの運営を、国際福祉開発学部の学生実行委員会が担います。

ニュースレターの後半では、自主企画でフィリピン調査を行ったり、青年海外協力隊に合格した学生の紹介もありますが、それもまさに、1年生から国際交流イベント運営の責任の一端を担い、各国ゲストと出会う中でつけてきた力といえるかもしれません。高校生のみなさん、ぜひ来年は一緒に国際交流イベントを盛り上げませんか！

目次

- 1～2 World Youth Meeting 開催報告!!
 3 国際会議 ICoME2013を開催しました
 4 第13回高大連携英語教育セミナー&
 高校生のための英語セミナー開催報告
 5～6 活躍する学生・先輩
 協力隊合格おめでとう！ 4年 鈴木 有華

- 世界で銅メダル！おめでとう！ 4年 磯村 拓
 資格取得おめでとう！ 3年 日野 恵美
 7 頑張ってます！卒業生のお仕事紹介
 第一期卒業生 酒井 宏樹
 8 夏休み！学生フィールド調査報告
 3年 古村 沙紀／教員 千頭 聡

World Youth Meeting 開催報告!!



学部長 影戸 誠 教授

「国際協働プロジェクト WYM を体験して」

暑い夏でした！しかし学生たちは今、達成感、充実感でいっぱいです。4月から取り組んできたワールド・ユース・ミーティングを成功させました。海外7カ国からの学生とともに取り組んだイベントは素晴らしい体験となりました。以下に、本行事の特徴と各国参加者から寄せられた声を御紹介します。

Conflict Resolution

今年度の全体テーマ「Breaking through Stereotypes (偏見を打ち破ろう)」にそって、海外学生と意見の違

いを調整し、チームとして考えをプレゼンテーションにまとめ発表しました。

English Presentation

国内外から参加した高校生、大学生とともに、15本の英語協働プレゼンテーションが発表されました。4～8分の短時間で主張したいメッセージを伝えるためにことばを研ぎ澄まし、簡潔な英語を目指しました。聴衆との双方向性が重視され、参加者皆が学べる素晴らしい機会でした。

Management

学生実行委員会が組織され、企画・準備段階から本番まで運営しました。去年の経験をもとに責任ある立場で



リーダーシップをとる2年生を、3～4年生がアドバイザーとして支え、初めての1年生を表舞台での活躍へと導きます。国内外の高校、大学など実社会と連携した緊張感ある学びで、英語コミュニケーションの実践機会であることはもちろん、学部のテーマ「国際的なチームで協働する」貴重な体験となりました。

◆ WYM 学生実行委員会メッセージ

国際福祉開発学部 2 年

石川和哉、篠原啓太、北岡由梨菜

「全体の目標を忘れずに、個に徹する」

学生は 11 の係り（統括、プレゼン、MC、海外対応など）に分かれ、それぞれの役割の中で WYM を作り上げます。全体を見ながら個々の役割を達成していきます。マネジメントの要素が強いので、本来の目標を忘れないよう常に意識して取り組みました。企画運営の経験とともに、海外参加者とのプレゼン作成、ビザ発行や滞在先の管理など国際ボランティアの経験もすることになります。

海外の学生との交流もこの WYM の醍醐味です。英語での会話が基本なので英語の活用もでき、このイベントでできたつながりがずっと続いていくのです。来年 2 月には彼らの大学を訪問する「国際フィールドワーク I」の授業が待っています。言葉ももちろん大切ですが、国際ホスピタリティも重要です。こちらが笑顔なら、むこうも笑顔で返してくれます。まず心を開くことに心がけました。

◆ WYM 海外参加学生の感想（レポートから抜粋）

カンボジア Kong Borasy さん（カンボジア工科大学）

There were a lot achievements that I unlocked during the WYM 2013. The three most important achievements were 1. Develop friendships, 2. Cooperate well to accomplish more, and 3. Smile to get a smile back. Needless to say, the people I met during the WYM were all amazing people. They taught me the value of friendship. They showed me that having nice people around you as friends is the most important thing in our lives. Now I can easily define a good life because I understand clearly what a good life means. A good life according to me is when you have good friends around to share all your laughter with. And that's absolutely what I want now and in the future.

フィリピン Leah Angelie M. Tutor さん
(ミンダナオ国際大学)

In joining the World Youth Meeting, I learned many things. The most important for me is that I was able to stand up and make a presentation in front of many people. Never in my existence had I ever thought about doing something like this. It scared me with all the people looking at me doing the presentation, but I did it! I did it and I am really proud because I now have more confidence in standing in front of many people. Through this event, I gained courage and new hope that I can do it.

韓国 Yu Jee Hyun さん（梨花女子大学）

In WYM, I felt I could break my stereotypes. For example, the presentation 'Handicapped people and our society' was really impressive and I was able to find my hidden stereotypes and break them.

I also learned to approach new friends. It was really hard to make new friends who use different languages but my new friends at WYM changed my attitude toward total strangers. They spoke to me friendly and called me Unni or Nuna (meaning old sister in Korean). They gave me strength to open my mind. With this experience I learned to make friends heart to heart.

マレーシア

Nur Diana Melissa Binti Mohd Noorizan さん
(マレーシア科学大学)

We exchanged gifts and hugs before the departure. Surprisingly, I did not cry. I was really hoping for that. But, NOT because I do not treasure my new friends, but because I refused to accept that tears means infinite farewell. We will, and I do believe we will see each other again. World Youth Meeting, and its steering committee that made it a success, thank you for all the memories and experiences you have given me. I went to Japan as a girl, and I came back as a lady with confidence and knowledge. Thank you. Hontou-ni Arigatou!



参加した日本福祉大学附属高校生からの感想（レポートから抜粋）

- ★初対面から仲良くしてくれた韓国の二人には本当に感謝しています。お互い母国語ではない言葉で話すのは本当に大変で、もどかしい思いをしましたが、必死に私の言いたいことを理解しようとしてくれました。英語を勉強してきてよかったな、と思いました。（近藤慧実さん）
- ★今回、韓国の学生と一緒にプレゼンテーションが出来てとても良かったです。たくさん苦労しましたが、一人一人が一生懸命練習して諦めずに頑張ったから成功することができました。（関野雅敏さん）
- ★練習の時はプレゼンテーションを上手にできるか不安だったけど、無事発表でき、国境を超えて同じ目標に向かって頑張れたことがすごく自分にとってプラスになりました。英語でのコミュニケーションの大切さを改めて知る事ができました。（山本真理奈さん）
- ★みんなでいる時は、本当に笑いが絶えなくて、「日韓問題」なんか全く感じませんでした。むしろもっとお互いの国のことを知りたいし、仲良くなりたいと思いました。もっといろんな国の人と関わってもっと広い世界を知りたいと思いました。（藤吉真菜さん）
- ★2013年8月7日、8日。この日は自分史上最も英語力が育った日です。（田中瑛さん）
- ★韓国の学生と二年後にお互いの大学受験が終わったら、私が韓国へ会いに行くことを約束しました。また一つ英語を頑張るための目標ができました！（梶田真由さん）

国際会議 ICoME2013を開催しました

佐藤 慎一 准教授

◆国際会議を本学で開催

日本福祉大学美浜キャンパスで8月9日（金）から11日（日）の3日間、日本教育メディア学会と日本福祉大学が主催する国際会議、International Conference for Media in Education (ICoME) 2013を開催しました。ICoMEは、教育における各種メディア、情報通信技術（ICT）の有効活用についての研究・実践の発表・共有の場であり、韓国、中国、日本を中心に8か国から大学・企業の研究者、大学院生、学部生など、163人が参加しました。

◆本学部生が運営スタッフとして活躍

国際会議のホスト校として選ばれるのは大変名誉なことです。しかし、その準備や当日の運営はたやすいことではありません。多くの作業を、英語を駆使しながら遂行していく必要があります。この大変な運用スタッフの役を、本学部の学生約20名が担いました。3年生を中心としてチームを組織し、受付、各セッションの会場運営、機器接続の支援、その他問い合わせ対応等、これまでに培ってきたファシリテーション力、英語力をいかして対応しました。参加者からも、多くの感謝の言葉をいただき、大きな達成感を得られたように思います。

◆若手研究者賞を受賞

ICoMEでは、若手研究者や研究者を目指している方々の場として、一般の研究発表とは別に、ラウンドテーブルと呼ぶセッションを設け、大学院生・学部生等からの発表も奨励しています。このラウンドテーブルセッションには、50を超える応募があり、本学部の学生も、3チーム（6名）が論文を投稿の上、発表を行いました。これらは、韓国の全南（チョンナム）国立大学の学生と協働で行った調査・研究活動の成果をまとめたものであり、うち2チームは見事に若手研究者賞を受賞しました（全体で15件の発表が受賞）。

◆会議の運営スタッフを体験して

4年 花岡 省吾

国際会議の運営を通して責任ある仕事を着実にこなすこと、3年生を中心とするチームで4年の自分がどのような立場で貢献していけるのか、不安も大きかったのですが、多くの方に支えていただき、無事にやり遂

げることができました。これまでも、WYMやボランティア活動でイベントを運営する機会もありました。しかし、今回の活動で国際会議の裏では膨大な作業が行われていることを改めて実感し、それらを着実にこなす大切さを学びました。この国際会議に関われたことで、海外の先生方から声をかけてもらえたり、韓国や中国の学生たちと深いつながりを持つことができたことは私にとって大きな財産になりました。



受付業務にあたる花岡君（右から2番目）

◆2年越しの悲願 ～若手研究者賞を受賞～ 3年 小倉 研児

僕は、去年、中国の北京で開催されたICoME2012に参加し、はじめて国際会議での発表を経験しました。うまく答えられなかった質問もあり、非常に悔しい思いをしました。今年は、中国での経験から学んだこともいかし、よりよい発表をしたいと思っていました。韓国の学生と協働で調査・研究・発表しましたが、違う国の同年代の人たちと、真剣に議論できたことは貴重な経験でした。協力しあって、去年より良い論文・発表になったとは思いましたが、まさか、賞をもらえるとは思っていませんでした。今後はこの賞に見合う実力をつけるよう、色々な機会にチャレンジし続けていきたいと思っています。



受賞の記念撮影（小倉君は一番左）

毎年恒例 !! 大人気 第13回高大連携英語教育セミナー&高校生のための英語セミナー開催報告

中西 哲彦 准教授

8月26日、第13回高大連携英語教育セミナーが行われました。2001年に始まった本セミナーは、中学、高校の先生から「英語教育の新しい流れがよくわかる」「授業で使えるヒントがたくさんある」と好評を重ねています。今年は、デジタル教科書がやってくる、国際援助の現場から、外国語としての英語教育の3テーマで行われました。

午前には、影戸学部長による講義「アジア諸国における ICT 活用の現状と日本との比較」に続いて、羽衣学園中学校・高等学校の米田謙三先生の司会で、デジタル教材が関連出版社より紹介されました。「アジア各国の教育現場で ICT 活用が進んでいて驚いた」「授業で取入れられるように頑張ろう」といった声が聞かれました。



午後からは、「国際援助の現場から～現場体験に基づく開発教育実践の可能性」として、JICA 新潟デスク・国際協力推進員の本田龍輔氏から、パプアニューギニアでの体験等を踏まえ、国際理解教育を英語教育の中で展開していく可能性をお話し頂きました。「英語教育の原点を見直すきっかけになった」という声が聞かれました。

続いて「外国語としての英語教育・その基本」として、本学イングリッシュ라운ジの Gary Kirkpatrick 先生が、子育て体験を踏まえたバイリンガル教育実践を報告しました。特に絵本の読み聞かせ実演は強い印象を与えたようです。

最後に、報告者による「時事英語を使ったこんな授業」では、高いレベルでの授業実践が行われました。「Native Speaker は、幼児期にこんなに英語を聞いている。英語の授業は英語で行う理由が身に沁みて分かった」「授業の構成の大切さと組立て方法がわかった」と好評でした。

続く27日には、高校生を対象とする英語セミナーを開催しました。国際企業の社員研修から、教員研修、英語学校の授業まで、幅広い指導経験を持つ教授陣が、「効果的な英語学習の方法」、リーディングの秘密、文

法学習のコツを中心にお伝えするセミナーです。今回も60名を超える高校生が参加し、緊張と笑いにあふれた1日でした。

1 大学入試と君達の未来

最初の講義では、報告者が「センター試験対策で忘れてはならないことは、まっとうな英語学習だ」と熱弁。2050年の人口構造予想図を見せながら、「日本も多文化共生社会になる。使える英語が必要であり、その基本は中学高校で学ぶ英語だ」と熱いメッセージを送りました。

2 聞ける、読める、話せるようになる

英文パッセージ学習を例に、読む・聞く・話す力を高める方法を紹介。参加者は、「フィジカルに音をからめて」「聞くことも大切に」学習することの大切さがわかったと感想をくれました。

3 英語 de ランチタイム

昼休みには、Gary Kirkpatrick 先生の指導のもと、ワイワイガヤガヤ楽しく英語活動。



4 語彙語法・文法問題の学び方

間違いを直して終わりじゃもったいないと、文法問題集を使った学習方法について、同時通訳訓練や、イメージを大切に暗記方法等、文法を自分の中に取込む学習方法が紹介されました。

5 英語と君たちの未来

第一部は、国際福祉開発学部の学生による「大学入学 Before and After」。学部の国際交流や、国際フィールドワーク体験を紹介しました。

第二部では、講師陣が、国際企業や社会人研修の体験を紹介。「世界を相手に仕事することは、もはや特別ではない」という言葉が、参加者の心に響いたようでした。効果的な英語の学習方法と、多文化共生社会で生きる将来への展望を参加者と共有できた、充実した一日でした。



活躍する学生たち サークル活動・資格取得から卒業後の進路まで

協力隊合格おめでとう！

世界とつながり、自分を生かす ～卒業後に青年海外協力隊へ～

4年 鈴木 有華

◆国際福祉開発学部で自分を育てる

来春卒業後、私は青年海外協力隊員としてカンボジアに赴任します。現地では、「青少年活動」という職種の隊員として、教育青年スポーツ省と連携を取り、運動会のデザイン、グループ活動の促進、道德教育の涵養などのお手伝いをする予定です。これまで、大学での学びを通じて、開発とは「世界を思いながら、学び、協力、生活していくこと」と考えていた私にとって、願っていたフィールドに一步を踏み出せることが、今とても嬉しいです。

振り返れば、大学でのひとつひとつの学びが、今回のチャレンジを導いてくれたように思います。入学直後から英語プレゼンテーション含む英語漬けの授業に取り組み、1年生の夏には、海外からのゲストを招いて企画運営するワールドユースミーティングで多くのアジアの若者と出会いました。同じ年の冬には、「国際フィールドワークⅠ」の授業でカンボジアを訪問し、子供との交流を企画したり、都市と農村の格差を目の当たりにしました。厳しい環境の下で学習に取り組む現地の小学生、中学生の姿は「学び」「しあわせ」について考えるいい機会となりました。いつまでもこの地にいたいと思うほど深い体験でした。

2年目には、英語の勉強がどんどん楽しくなりました。音楽サークルの活動にも積極的に打ち込み、2年目のワールドユースミーティングでは音楽セッションを担当する係のリーダーとして1年生の指導にも取り組みました。大学祭では、カンボジアでつながりができたNGOのフェアトレード商品の販売も行い、学生生活はますます充実していきました。語学を使う経験を積みたくて、春休みには約2か月間、一人でアメリカにも赴きました。

3年生では、ワールドユースミーティングでカンボジアの学生とともに協働プレゼンテーションを行いま

した。文化の違いから生じる意見の衝突を乗り越えて、何百人もの聴衆の前で発表できたことは大きな自信となりました。その年は、ゼミ学習の一環で韓国での国際会議にも参加する機会をいただき、ソウルで現地大学生とともに英語で発表し、「異文化理解を中心とした自分育て」について話しました。

◆4年目：休学してイギリスへ



4年生では、約1年間イギリスに滞在し、身体障害者施設でボランティアをしました。カンボジアでの学びをベースに、改めて「豊かな生活」「幸せ」について考える機会となりました。整った施設や介護をしてくれる職員がいて、三食食えることができる恵まれた環境でも、障害とどう向き合い生活していくのかは、単純なことではありませんでした。ここでの経験を経て、私は、思いあうこと、それを伝えることの大切さ、そして「人間らしい生活」について考えるようになりました。

また、4年間を通して、国内外で英語でコミュニケーションをとる機会が多くあり、入学時に英検準2級だったものが、現在ではTOEIC830点、英検準一級合格までに力を伸ばすことができました。ただ単に英語を学ぶのではなく、使いながら英語を身に着け、英語とともに私の中に入ってくる人々の声や体験が、私を育ててくれたものと思います。

このように、4年間で得た「学び」「体験」「感動」が、今回わたしが青年海外協力隊にチャレンジする土台となりました。

◆進路選択：青年海外協力隊へ

大学生活は文字通り、自分探しの旅でもありました。人が幸せになることに関わっていきたい、国内、海外

を問わずその中で自分の人生を送っていきたくて願うようになりました。世界の中で私に何かできることはないかと思ったのが、青年海外協力隊に応募した動機です。

卒業後に携わる、カンボジアでの青少年活動の支援を通じて、自分育てをさらに続けていきたいと思えます。今まで学んできたコミュニケーション力を生かし、現地の人と心を通わせ、英語や日本語教育を授業の一つとして取り入れられたらいいな、と考えています。いろいろ困難が待ち受けているかもしれませんが、持ち前の明るさとしぶとい根性で何事にも負けずに色々なことに挑戦していくつもりです。

世界で銅メダル！おめでとう！

サークルで活躍する学生の紹介

本学部4年、磯村拓君、フライングディスクのu-23世界アルティメット選手権という国際試合に、日本チームの一員として選抜され、7月21日から約2週間、カナダで活躍。日本チームは、見事銅メダルを獲得しました。

磯村君は、1年からサークルに入り、2年からはチーム・リーダーとして活躍。学部の仲間からは、まじめで思いやりのある学生として、「ケビン」（いわれは不明）という愛称で親しまれてきました。単独の花形プレーヤーとうより、きっと良いチーム・プレーヤーとして活躍したことでしょう。

ゼミ教員 岡本真理子 教授

磯村君よりメッセージ

今回、日本代表としてカナダ・トロントで開催された世界大会に出場しました。現地では食文化の違い、時差ぼけ、言葉の違いなどアウェイならではの苦労がありました。僕が今大会で一番印象に残っている場面は、準決勝のカナダ戦です。一点を争うシーソーゲームの中で、一つのミスも許されない厳しい環境でレギュラーとしてフル出場した事は、忘れられないものとなりました。日の丸を背負ってプレーする事はとてもプレッシャーがありましたが、チーム一丸となって銅メダルを獲得する事ができ、この経験は一つ自分の大きな自信になりました。



資格取得おめでとう！

IT パスポートとりました

3年 日野 恵美

高校生のときに情報系の資格をいくつか取得していましたが、それらは民間の資格だったので、IT パスポートが国家資格という言葉にひかれました。また、IT パスポートは情報技術だけでなく、マネジメントやストラテジについても学ぶことができるので、社会に出たときに必要な知識を身に付けられるとも思いました。



学部の准教授でICT科目担当の佐藤先生には毎週勉強会を開いてもらいました。まず、予習してきたテキストの確認を行い、わからないところを丁寧に解説していただきました。私は計算系の問題が苦手だったので、同じ問題を繰り返し解き、よく出るいくつかの解き方を覚えるようにしていました。わからない用語などは、集中して覚えることができるよう、ノートに手書きでまとめ覚えていました。また、Facebookのグループを活用し、先生がそこに定期的に問題を出題してくださいました。そのお陰もあって忘れずに学習を続けられることができました。

一緒に取り組んだ仲間とは、予習への取り組みの確認をし、励まし合いました。試験間際はひたすら過去問を解いていたのですが、わからないところを教えあってお互いに学びあうことができたと思います。一緒に受けた仲間も合格することができました。

佐藤先生は毎週私たちのために多くの時間を割いて丁寧に解説していただきとても感謝をしています。この学部では、「これをしたい」、と思うと、先生方がその目標に向かって協力をしてくださいます。今回の試験で、改めてこの学部の先生との近さの良さを感じることができました。

ITパスポートは、IT化された社会で働くすべての社会人が備えておくべきITに関する基礎的な知識が証明できる国家試験です。経営戦略、財務、法務など経営全般に関する知識をはじめ、セキュリティ、ネットワークなどのIT技術の知識、IT管理の知識など幅広い分野の総合的知識が問われます。(ITパスポート試験Webサイトより)

頑張ってます！卒業生のお仕事紹介

第一期卒業生 酒井 宏樹

◆英語教員として

私は、平成24年度に大府西中学校で英語科常勤講師として勤務し、平成25年度に正式に採用され、東海市立横須賀中学校の英語教員として働いています。去年は、1年生と2年生を2クラスずつ教えました。今年は3年生を4クラス教えています。英語が好きという生徒を一人でも多くしたい、という思いから生徒が「英語の授業」が楽しい」と言ってくれる授業を目指しています。そのために「毎授業において生徒を3回は笑わせる」ことを志として持ち、授業での活動や話す内容を考えています。また、教師と生徒の活動よりも生徒同士による活動など、生徒が主体的に活動できる場面を多く設定できるように授業を組み立てています。

◆部活動顧問として

去年は、サッカー部の副顧問として指導にあたりました。サッカーを大学までやっていた自分の経験を指導に活かすことができ、3年生最後の大会では知多半島大会でベスト4に入ることができました。

今年は、初任者ながら男子ハンドボール部の主顧問をやっています。サッカーしかやってこなかった自分にとっては、全く経験のない部活を担当しているわけですが3年生最後の大会では知多半島大会優勝、県大会ベスト16という成績を取ることができました。



◆採用試験合格のための努力をどのようにしたか

二度の採用試験をうけ合格することができました。合格した二回目の採用試験にむけて私自身が行った採用試験対策を紹介するので、これから採用試験をうける学生の方々へのアドバイスになればと思います。

その年は、問題をひたすらやり力をつけようと思い、全県の過去問をやりました。それでも筆記の結果は「C」評価でした。そんな低い評価だったにも関わらず私が合格することができたのは、面接の評価が良かったからでした。面接の練習をたくさんし、自分をアピールできるようになったことが勝因だと思っています。

採用試験にむけて努力している学生の方々には、学生という立場を上手く活用し、大学の先生にお願いし面接の練習をたくさんしてもらったり、予備校などの教採の面接対策に申し込んだりして面接の力をつけてほしいと思います。

◆国際の教職課程がいかに素晴らしいか

国際福祉開発学部教職課程の素晴らしさは、先生との結びつきの強さだと思います。学部として人数が少ないのでひとりひとりをとても大切に育ててくれます。様々な種類の英語の授業が少人数体制で受けられること、模擬授業をやる回数も他の大学に比べて多いことや、色々な教授法・言語活動を教えてもらったことは、あとになってありがたいことだったと強く感じています。



大学の授業では、ユニークな模擬授業を展開し、生徒が楽しく英語の授業を受ける工夫をしていました。彼の英語の授業を受けると、きっと英語学習が好きになりそうです。

指導教員 小倉美津夫 教授

夏休み！学生フィールド調査報告

国際福祉開発学部では、初年次からの段階的なアクティブラーニングの一環として、「国際フィールドワークⅠ」で、全員が1年目に海外フィールドワーク（カンボジア、フィリピン、マレーシア等）を経験します。2年目以降は、学生が個々の関心に基づいて、ゼミ教員などの指導を受けながら、国内外で自主企画するフィールド調査を奨励しており、計画・実施・報告書作成等の条件を満たせば「国際フィールドワークⅡ、Ⅲ」などの単位取得ができる制度があります。

継続的なフィールド調査の実践 ～フィリピンと日本でジェンダーを考える～

3年 古村 沙紀

夏期休暇を利用して、1か月間フィリピン共和国首都マニラに、NGOでのインターンシップを含む調査に行ってきた。今回が3度目の訪問です。

1年目に受講した「異文化理解」の授業でジェンダーに興味を持ち、春休みに「国際フィールドワーク（FW）Ⅰ」で初めてフィリピンを訪れ、日本とフィリピンのジェンダーについて知りたいと思うようになりました。

2年生の終わりには、自分で企画・実施する「国際FWⅡ」を申請して再び現地を訪れ、日本に出稼ぎにきたフィリピン人女性の支援を行っているNGOでインターンシップとボランティアを行いました。

そして3年目の今回は、現地をより深く知るためにもう少し長く滞在したいという思いがあり、FWⅢ（1か月以上が条件）の単位申請を行いました。渡航費等の必要経費は、学内の海外調査奨励金プログラムに応募して合格し、支援していただきました。

この1カ月は、日本人男性とフィリピン人女性の間に生まれた子供の日本国籍取得等の法的な支援を行うNGOでインターンシップを行いました。クライアントの家庭訪問や国籍申請手続きをしたり、一緒にワークショップも企画運営しました。仕事を通して、クライアントとインターンである自分の距離を近くに感じ、彼女達の生活の実態を仕事から観察出来ました。長く滞在して人々の思いや生活実態を感じられたことが、今回の最大の収穫です。

1年生からの関心を掘り下げていく上で、自分自身で計画して行うフィールドワークに対する単位申請や援助制度が整備された恵まれた環境にいたことをとても実感しました。私は今後、これまでの調査を



インターンが企画運営したワークショップ

来年度の卒業論文へ繋げていけるように、国内も含めて調査を継続的に進めていく予定です。

大学と地域との連携による学び

千頭 聡 教授

今年度から新設された、総務省の域学連携事業。大都市圏の学生が中山間地域に入り、



地元の方々と交流しながら、地域の成り立ちを学んだり、地域おこしへの提言を行ったりする事業です。全国で4地区採択されましたが、その1地区が中津川市加子母で、申請書作成のお手伝いをし、見事採択されました。



3年生、4年生約10名が、ゼミの枠を越えて参加。8月から9月にかけて、1～4週間にわたり、加子母に泊まり込んで調査を続けています。3年生は、1週間にわたって、地域づくりの中核を担う20人以上の方にインタビュー敢行。映像に収めて、加子母プロモーションビデオづくりに取りかかっています。4年生は、自分の進路に役立てたり、卒業論文に向けた調査も兼ねて、加子母特産のトマト農家にお世話になり、農作業に従事しながら、日本の農業の強さと厳しさを体験したり、地域の伝統文化がどう受け継がれているかを、様々な方にヒアリングさせていただきながら、祭りの準備にどっぷり入り込み、加子母最大のお祭りでは、地元の方と一緒に山車をひいています。関西、関東の大学生との交流機会もあり、学び多い時間を過ごしています。

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田
TEL. 0569-87-2211 FAX. 0569-87-1690
<http://facebook.com/nfuiwd/>

編集人：国際福祉開発学部 学部長 影戸 誠、准教授 小國 和子
お問い合わせ：wym-jim@ml.n-fukushi.ac.jp